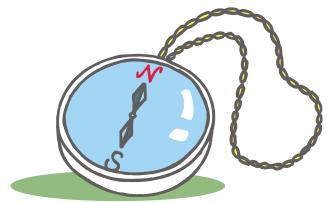


羅針盤



第 28 号

令和5年12月11日(月)

◆ ハチドリの一滴 (ひとしづく)

古くから南米のアンデス地方に伝わる「ハチドリの一滴 (ひとしづく)」というお話を生徒の皆さんには知っているでしょうか。そのお話とは、次のようなお話です。『あるとき、みんなの森が燃えていました。森に生きる生き物たちは、その燃え盛る炎に背を向けてわれ先にと逃げていきました。しかし、一羽のハチドリだけは、燃え盛る炎へと飛んで行くのです。名前は、クリキンディ。クリキンディは、燃え盛る炎の上までくると「ポトリ」。小さな小さな口ばしに含み運んできた、一滴 (ひとしづく) の水を落とすのでした。「ポトリ」と一滴の水を落としては、口ばしに水を含みに飛んで戻る。小さな口ばしに一滴含んでは、再び燃え盛る炎の上に飛んでいき「ポトリ」。「ポトリ」、「ポトリ」、「ポトリ」。森の火事に一滴ずつ水を運ぶ、小さな鳥ハチドリのクリキンディを、逃げる動物たちは笑います。「そんなことをして、いったい何になるのだ」と・・・。森の火事に、一滴の水。「焼け石に水」だと笑う仲間の動物たちへ、クリキンディの答えはこうでした。「私は、私にできることをしているだけ」と。』この短い物語に込められているメッセージを皆さんはどうに捉えるでしょうか。クリキンディはハチドリという小さな体（体長10cmぐらい、体重2~20g程度の小さな鳥です）ながら大きな勇気の持ち主であると感じられるのではないでしょうか。そして、他の動物たちは臆病者で、自分さえよければいいといった卑怯者のようにも感じられますが、果たしてどうなのでしょうか。動物たちが火を消そうとすることもなく逃げ出してしまった本当の理由、・・・。大きな体で力持ちのクマは幼い子グマを守るために避難したのかもしれません。足の速いジャガーは後ろ足を使って火に砂をかけることに気づかなかっただけなのかもしれません。しかし、そういったことも考えられるものの、クリキンディが伝えてくれていること。それは、「他の人を非難したり、怒りや惜しみや妬みに身を任せる暇があったら 自分の出来ること、自分にも出来ることを淡々とやっていこうよ。」とクリキンディは伝えようとしているのではないでしょうか。私たちは



あまりにも大きな問題や困難に取り巻かれてしまった時、それを考えるだけで気が遠くなってしまったり、あるいは、あきらめや無力感に心を支配されてしまうようなことが多々あります。どんな困難な中にいても私たち一人一人には「出来ること」が必ずあるんだよと、クリキンディは教えてくれているのでしょうか。あの燃えていた森は、この世の中を覆っている闇の事かもしれません。戦争、飢餓、貧困、差別、そして、環境破壊など・・・、この世の中には大変な問題をたくさん抱えもっています。でももっと大きな問題は、これらの事に対して「自分には問題を解決する力なんて無い」とか、「そんな事をして何になるんだろう」と大切な事柄や行いに目をつぶってしまうことではないでしょうか。私たち一人ひとりは、小さなハチドリの力に過ぎないかもしれません。この無力感やあきらめを吹き払い、しっかりと目を開いて問題と向き合い、「私にできること」について考え、行動し、それらを積み重ねてゆくことができるなら、燃えている森の「火」を消す力にだってなれるかもしれないと思わずにはいられません。私たち一人ひとりが小さなハチドリに負けない少しの勇気を持っていれば、世界を変えていく人として暮らしていくのではないでしょうか。

